

研究ノート

肝疾患患者の療養継続支援の研究の動向と課題



伊藤あゆみ¹⁾, 糸島 陽子¹⁾, 奥津 文子¹⁾

¹⁾ 滋賀県立大学大学院 人間看護学科 人間看護学専攻修士課程

背景 慢性肝疾患は、数十年をかけて確実に肝硬変や肝臓がんに移行することが大きな問題として注目されている。長期の療養を余儀なくされることに加え、肝硬変の進行や、数十年後にはがん化するため、身体的にも精神的にも長期にわたる支援が必要である。肝疾患患者の療養継続を支えるうえで、看護師の支援が重要だと考えられる。

目的 肝疾患に関する看護研究を概観し、療養継続の支援に関する研究に焦点を当て、肝疾患をもつ患者の療養継続の支援の現状と課題を明らかにすることを目的とした。

方法 医学中央雑誌にて「肝疾患」と「看護」「療養」「家族」「支援」のキーワードを用い、様々な組み合わせで、2003年から2012年までの看護研究の検索を行った。そのうち、肝疾患の治療や薬剤に関連がないものを除外した169件を研究対象とした。文献数の年次推移と研究のデザインに基づいて分析を行い、患者の療養継続支援に関する研究を、内容の類似性に基づいて分類し解析した。

結果 1) 肝疾患患者に関する看護研究は、2007年の肝疾患診療連携拠点病院の設置以降、一時的に文献数の増加がみられた。2) 看護師は「患者の理解度を向上させるための情報提供」「患者の意思決定の支援」「闘病継続力を維持するために、セルフケア能力や生きがい、信頼（家族や医療者への）を支えるための情報提供と精神的支援」「患者の話聞き気持ちの整理を支援」を行っていた。支援の評価には様々な指標が用いられていた。長期にわたる縦断的研究は少なかった。

結論 長期的な肝疾患の患者をささえるためには、横断的研究のみではなく縦断的研究が必要である。また、看護師による家族や同病者への支援に関する研究は少なかった。家族や同病者に焦点をあて、患者のソーシャル・サポートを意識した支援の研究が必要である。また、看護師がどのように認識しながら、患者への多様な支援を実施しているのかに焦点を当てた研究を行い、支援内容を患者ニーズと照らし合わせ、検討する必要がある。

キーワード 肝疾患、看護、療養継続、支援

An overview of nursing researches on the supports to patients with liver diseases

Ayumi Ito¹⁾, Yoko Itojima¹⁾, Ayako Okutu

¹⁾Graduate School of Human Nursing, University of Shiga Prefecture

2012年9月30日受付、2013年1月9日受理

連絡先：伊藤あゆみ

滋賀県立大学人間看護学部

住 所：彦根市八坂町2500

e-mail : ito.ay@nurse.usp.ac.jp

I. 緒 言

日本における肝疾患の多くは、ウイルス性の肝疾患であり、その終末像として肝硬変や肝臓がんがある。ウイルスの感染から慢性肝炎へ移行し、その後肝硬変、肝臓がんへと進むことがわかっており、その進行は20～30年と長期に渡る。肝臓がん罹患者のうち、約95%がウイルス性肝疾患由来の肝細胞がんである¹⁾。また、C型肝炎、B型肝炎の罹患者は、キャリアも含めると約350万人²⁾とされている。肝炎ウイルスの発見から、その感染防止に対する方策が進み、肝炎ウイルスによる新たな感染は減少傾向にあるが、具体的な肝炎ウイルス罹患患者数はわかっ

ていない³⁾。また、近年では生活習慣による非アルコール性脂肪性肝疾患（NAFLD）が注目されており、わが国の成人の約2割が罹患しているとされている⁴⁾。また、その一部が非アルコール性脂肪性肝炎（NASH）として肝硬変に進行し、肝臓がんを発症することが明らかになっている。しかし、症状に乏しく血液検査や画像診断でないと診断は困難であり、具体的な罹患者数が不明なため、今後、増加の可能性が指摘されている。

ウイルス性肝疾患（特にC型肝炎）の広がりを受け、日本では肝炎対策として、緊急肝炎ウイルス検査事業や、インターフェロン（IFN）医療助成事業などの充実が図られてきた⁵⁾。その対策として近年では、2007年に肝疾患診療連携拠点病院体制の整備がなされ、現在は全国に70病院が設置されている。拠点病院ではその機能として、以下の役割を果たしている。第一に、肝疾患に関する医療情報の提供、第二に、都道府県内の専門医療機関等に関する情報の収集や提供、第三に、医療従事者や地域住民を対象とした研修会・講演会の開催、相談支援、第四に専門医療機関等との協議の場の設定である。そして2009年、「肝炎対策基本法」が施行され、厚生労働省より肝炎の基本的施策が法律として打ち出された。

慢性肝疾患は確実に肝硬変へ進行し、いずれはがん化する、死に至る疾患である。肝疾患（C型肝炎・B型肝炎）治療のガイドラインによると、肝硬変や肝臓がんへの進行を抑えることが治療の目的とされ、食事療法やIFNによるウイルスの除去が行われる。肝臓がんが発生した場合には、がんに対する治療も当然行われる。それらは、どれも長期的・反復的であり、肝疾患患者は長期の療養が必要となる。そのため、肝疾患患者の療養の継続には、セルフケアへの支援や心理的なサポートなども重要と指摘されており⁶⁾、看護師の支援の役割は大きい。

そこで本研究では、肝疾患に関する看護研究を概観し、療養継続の支援に関する研究に焦点を当て、肝疾患をも

つ患者の療養継続の支援の現状と課題を明らかにすることを目的とした。

II. 用語の定義

療養継続の支援：肝疾患を持ちながらの闘病生活において、生活に留意しながら治療を続け、健康の増進を図るための手助け。アルコール依存に伴う肝疾患やその患者への支援については、精神面について、他の肝疾患と異なると判断したため、今回の「療養継続の支援」では除外した。

III. 研究方法

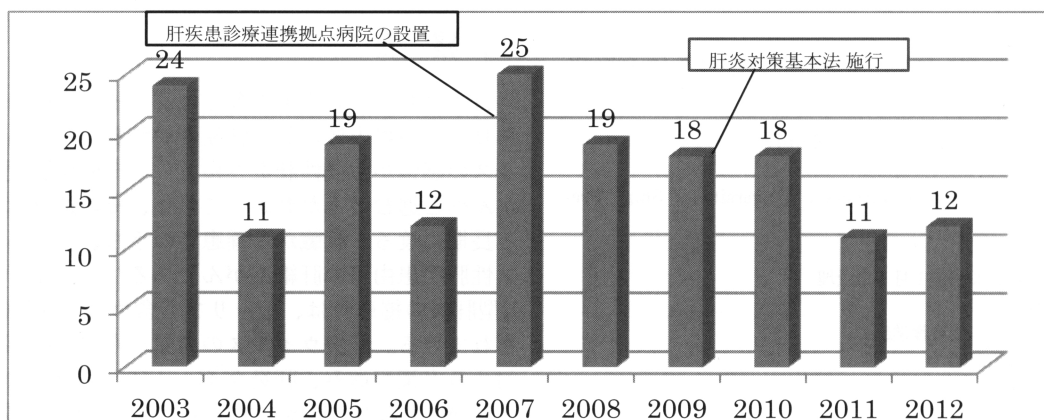
1. 研究対象

医学中央雑誌（Web版version 5）にて2003年から2012年までの10年間を対象に、「肝疾患」と「看護」「療養」「家族」「支援」のキーワードを用い、様々な組み合わせで検索を行った。対象とした文献種別は、原著論文、研究報告、実践報告、短報である。ヒットした文献数は303件あった。その中で、テーマや内容が肝疾患の治療や薬剤に関連がないもの、原発が肝疾患ではないもの、依存症に関連した肝疾患をテーマとしているもの、重複文献を除外した169件を研究対象とした。

2. 分析方法

文献数の年次推移と研究デザイン、研究内容の分析を行った。研究内容の分析は、研究の記載内容を要約し、内容の類似性に基づいて分類した。その際、テーマ、抄録、シソーラスを参考にした。分類した中で、療養継続の支援に関連する文献をさらに細かく分析し、肝疾患をもつ患者の療養継続の支援に関する研究の動向と課題を明らかにした。

図1 文献総数の年次推移



IV. 結果

1. 肝疾患に関する看護研究の動向

1) 文献の年次推移

年次推移としては、2003年24件 (14.2%)、2004年11件 (6.5%)、2005年19件 (11.2%)、2006年12件 (7.1%)、2007年25件 (15.8%)、2008年19件 (11.2%)、2009年18件 (10.6%)、2010年18件 (10.6%)、2011年11件 (6.5%)、2012年12件 (7.1%) であった。(図1)

2) 研究のデザイン

量的研究96件 (56.8%)、質的研究70件 (41.4%)、文献研究3件 (1.8%)、トライアングレーション1件 (0.6%) であり (図2)、量的研究と質的研究の割合年次推移は図3の通りである。

量的研究と質的研究の割合では量的研究が多い結果となっているが、年次推移で量的研究と質的研究の割合をみると、近年では質的研究がやや増加する傾向にある。量的研究の手法は、アンケート調査による実態調査が最も多く、比較研究や準実験研究は少なかった。質的研究では事例研究が最も多かったが、ここ数年ではグラウンデッド・セオリーや内容分析などを用いた質的帰納的記述研究の増加が見られた。

3) 研究内容の分類

研究内容としては、肝疾患患者の看護111件 (65.29%)、治療や薬剤の効果・副作用12件 (7.09%)、感染管理・針刺し20件 (11.76%)、症例検討・疫学的調査26件 (15.88%) であった。(図4)

4) 肝疾患患者の看護111件をさらに、療養継続の支援に関係のあるものとならないもので二分すると、療養継続の支援に関連するもの42件 (37.8%)、療養継続の支

援に関連しないもの69件 (62.2%) であった。

療養継続の支援に関する研究の42件での年次推移は、2003年3件 (7.1%)、2004年1件 (2.4%)、2005年2件 (4.8%)、2006年5件 (11.9%)、2007年5件 (11.9%)、2008年4件 (9.5%)、2009年4件 (9.5%)、2010年11件 (26.2%)、2011年1件 (2.4%)、2012年2件 (4.8%) であった。研究デザイン別の内訳は、量的研究17件 (40.5%)、質的研究24件 (57.1%) トライアングレーション1件 (2.4%) であった。療養継続の支援に関する研究の年次推移や研究デザインの傾向には増減が見られた。

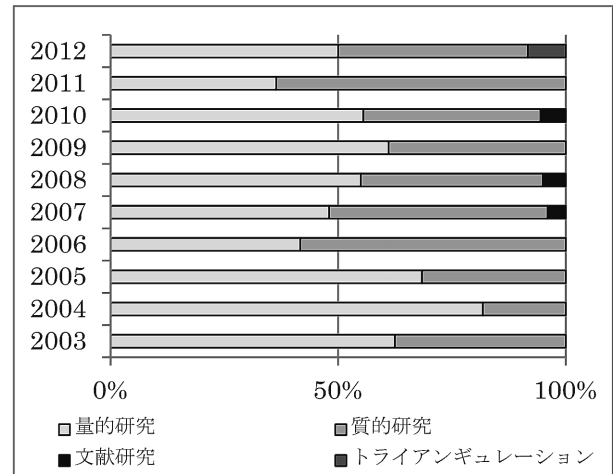


図3 研究の種類別年次推移

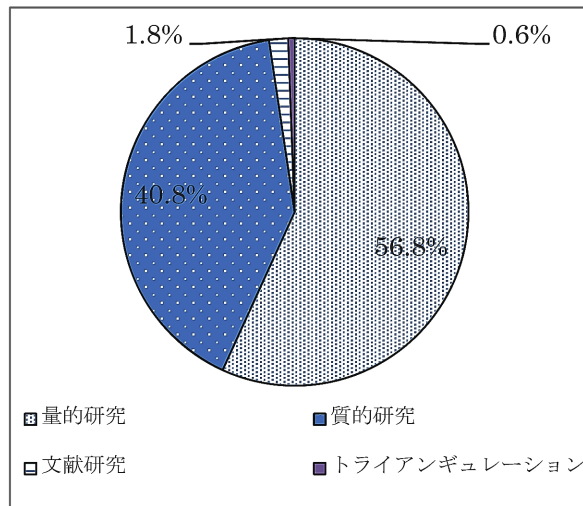


図2 研究の種類別割合

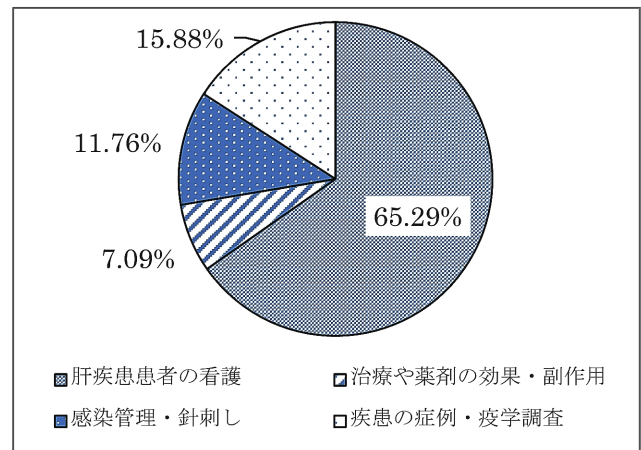


図4 肝疾患に関する看護研究

2. 肝疾患患者の療養継続の支援に関する研究の動向

肝疾患患者の療養継続の支援に関する研究42件には、「患者の療養継続の力を高める支援」「看護師が抱く思い」に関する研究があった。支援の対象によって分類すると、患者に対するものが最も多く、家族や周囲の人（同病者や他医療者）に対するものは少なかった。

1) 患者の療養継続の力を高める支援

(1) 患者に対するかかわり

患者本人に対する支援としては、「情理的支援（指導・教育、精神的安定、意思決定支援のための）」「精神的支援」が多く、また「社会的支援」も行っていった。

患者の状況にあった療養指導・情報提供をするために、体調チェック表や鬱性自己評価尺度（SDS）を用いて「患者の状況」を把握していた⁷⁾⁸⁾⁹⁾。「患者の状況」把握に基づいて、看護師がどのような介入を行い、どのような効果があったかを分析した研究は2件あったが、いずれも事例研究であった⁸⁾。

指導・教育としては、看護相談や肝臓病教室のように、肝疾患患者とその家族のために特別に設置された部門で行っている場合ばかりでなく、病棟（入院中や退院前）や外来で行われている場合もあり、様々であった。

看護相談では、「情報提供」による知識や理解の向上を図ることに加えて、「親しみやすさを保つこと」「親身になって関わること」「傾聴と支持」「気持ちの整理を助ける」ことによって、精神的なサポートをしていた¹⁰⁾。

肝臓病教室では、「情報提供による理解度の向上」「同病者との交流が持てるグループワーク」「家族と患者が意識合うための工夫」が必要であるとされている¹¹⁾¹²⁾。より具体的な支援の内容としては、「情報提供を患者のみではなく家族にも一緒に行う」「家族のサポートの必要性について患者と家族にアンケートを取る」というものがあつた。肝臓病教室の評価のために、情報提供による認知率の変化を調べた研究¹²⁾では、受講歴と認知率の間に関連があつた。彼らは、独自のアンケートを使用して評価し、入院時と退院時とを比較した。肝臓病教室での情報提供に対する医療者及び患者の意識調査¹³⁾では、提供すべきだと考えている情報には、患者と医療者の間で相違があつた。患者は、治療の方法と効果、食事療法、合併症とその対策、薬の知識などを肝臓病教室にて提供すべき情報としていた。一方、医療者は肝臓病の総論、肝臓の働き、治療方法、合併症とその対策、食事療法などを提供すべき情報だと考えていた。同時に調査された肝臓病教室のメリットに

ついては、患者・医療者ともに、「自己管理の向上」「治療に対して前向きな気持ちになれる」「不安の軽減」を挙げていた。

病棟や外来での患者指導では、IFN治療前の診察で「患者の身体的・精神的状態の把握」を行い、「症状に応じた生活面での指導」「不安・負担に対する声かけ」を行っていた¹⁴⁾¹⁵⁾。

患者の自己管理や治療継続を目的として、クリニカルパスシートやパンフレット、自己体調表の使用による効果も検討されていた。これらのツールを用いると、使用後の理解度が上がり、クリニカルパスやパンフレットの効果が大きかった¹⁶⁾¹⁷⁾。患者のセルフケア能力や自己効力感などを含む、患者の療養継続の力を高めるために、視覚的に自己の状態を確認できるようにしていた。患者が視覚的に確認できるものとして、自己体調表だけではなく、採血データ（ウイルス量）も活用していた⁸⁾。その効果を評価するために、患者の気持ちなどの聞き取り調査や、アンケート調査を行っていた。しかし、独自に作成したアンケートを用いており、尺度などの客観的な指標は使用されていなかった。体調チェック表などの患者の状態が把握できるツールは、活用することにより「患者と医療者が共通の問題意識をもつ」ことの必要性も感じて作成されていた。

患者支援のために使用していたクリニカルパスやパンフレット、体調チェック表は、C型肝炎の治療であるIFN療法を受けている患者や、肝硬変で食事療法や排便コントロールが必要な患者に使用されていた。

具体的な支援内容ではなく、看護師の支援を包括的に検討した研究によると、看護師は「がんへの進行を予期して生きること」「意味を見出すこと」「自己擁護者となること」「よりよい生を創造すること」を支援していた¹⁸⁾。また、「患者の状況にあった療養指導」「肝臓のイメージ化への工夫」「患者が語ることでの意思の確認」「医療チームでの関わり」が必要なケアだと感じて、支援を実施していた¹⁹⁾。

(2) 家族に対するかかわり

今回対象とした研究では、家族のみを対象とした研究は見当たらなかった。

患者と家族を対象とした看護相談では、両者ともに相談内容として「食事などの生活面」「不安や悩みなど精神面」が話されている。患者家族のみでは、「介護と死別後の悲しみ」が相談内容としてあつた。その相談を受けて看護師は「情報提供と情報の共有」「親しみやすさを保つこと」に気を配り、「気がかりなどなんでも話してほしいという姿勢」を持ってかかわっていた¹⁰⁾。

また、外来でのIFN治療場面では、副作用出現の有無に関して、「連絡が必要な症状について説明」し、家族が患者の変化を感じた時の対処として、「何か様子がおかしければ連絡」してほしいと伝えていた¹⁶⁾。

肝臓病教室でのかかわりとして、家族の知識向上をおこなうことで、「患者の一番身近にいる家族が患者を支援」できるようかかわっていた。また、「患者と家族が意識し合えるようなかかわり」についての必要性を述べていたが、支援の内容としては具体的には述べられていなかった¹²⁾。

(3) 同じ疾患を持った人に対するかかわり

患者同士のかかわりを促す支援に関することを明らかにした研究では、患者が同じ疾患を持った人とかかわれたことにより得た変化として、「安心や頑張る気持ち」を得ていたが、一方で「不安や恐怖」も感じていた²⁰⁾。

同病者が集まる機会で見舞員が行う支援として、懇談会や肝臓病教室での「和やかな雰囲気づくり」があった¹¹⁾。その支援により、会の終了後には患者同士が個々に情報交換をすることができ、そのような「場」を提供すること自体も支援であるとされていた。

その他、患者への支援の前段階として、「医療者間の意識の統一」がされており、患者との信頼関係につながっていると述べられていた²¹⁾²²⁾。

2) 看護師が抱く思い（患者にかかわるときの関係や姿勢など）

肝疾患患者にかかわる看護師は、長期にかかわることが多く、「患者に関心を持つことの大切さ」「意向に沿った看護の重要性」「患者に対する尊敬の気持ち」「患者と同病者や患者と医療者との結びつきの深さ」を感じていた。また、「納得するケアが行えないときは苦悩」を感じたり、長期つき合いのために「患者の状態悪化の時の辛さ」も感じていた¹⁹⁾。

技術や知識においては「安全で確実な技術の実施が必要」と感じながらも、「自信のなさ・不安」や「知識の不足」を感じていた。そのため、看護師自身の自己効力感を高める勉強会や、クリニカルパスの活用方法についても研究されていた²³⁾²⁴⁾。

V. 考 察

1. 肝疾患に関する看護研究の動向

肝疾患に関する看護研究の年次推移をみると、肝炎対策の法整備や、肝疾患診療連携拠点病院が設置されたことにより、2007年には一時的に文献数が増加したと考え

られる。その他、研究発表の件数については増減があった。肝炎ウイルスが発見されて以来、その感染経路や、ウイルス性肝炎を発症したのちの病態が明らかになるにつれ、肝炎治療薬であるIFNやリビリンの併用などの認可が年々進み、日本における肝炎対策も整備されていったという現状があり、研究の発表年代にばらつきがあるのだと考えられる。

研究をデザイン別にみると、肝炎ウイルスの感染とその管理に関する研究や、治療薬とその副作用などの実態を調査した研究では、量的研究手法がとられている傾向がみられた。C型肝炎ウイルスの実体が徐々に明らかとなり、C型肝炎に関する感染とその管理、疾患に伴う症状と治療薬、治療薬とその副作用や対処などの研究も徐々に進んだ。質的研究は近年増加傾向にある。肝疾患は長期に療養が必要となるため、患者の特性や心理を理解して関わる必要があることが一因だと考えられる。肝疾患は、長期的・反復的な治療が必要となり、また炎症が落ち着いてからも慢性化することが多く、生活の調整や自己管理も長期に及ぶ。そのため、肝疾患をもつ患者とその家族、看護師などの医療者も、肝疾患と長期にかかわっていくことになる。そのため、患者の特性や心理過程にせまる研究を行うことにより、肝疾患をもつ患者への理解をより深めることが必要となったと考えられる。患者を理解することは、その患者への支援を考える上で必要であり、直接または間接的に患者への療養支援を行う医療者が、患者にどのような認識を持つかということも、患者への支援に影響すると考えられる。

2. 肝疾患患者の療養継続支援に関する研究の動向

患者の療養継続の力を高める支援としては、「情動的支援」「精神的支援」が主となっていた。

情報提供では、患者のセルフケア能力として知識や理解度を向上させる目的とともに、情報を得ることによる患者の精神的安定も目的としていた。情報提供のためのツールや場面としては、様々なものが使用されており統一されたものはなかった。情報提供の効果をみた研究では、独自の指標を用いていることが多く、また調査対象の人数も少ないので、一般化は困難である。情報提供として患者が求めている内容と、医療者が患者にとって必要だと感じている内容には違いがみられる¹³⁾。肝疾患患者にとって、どのような情報がどのような面で効果があったのか、さらに研究で明らかにし、患者にとってのよりよい情報提供のあり方を考える必要がある。

肝疾患患者は、比較的症状に乏しく、自分で自分の状態を把握することが困難である²⁵⁾。そのため、情報を得ることで自分の病気や状態について知り、それが安心感へとつながるような行動を、患者自らがとっている²⁵⁾。そのように、肝疾患患者の特性である「自分の状態を症状

から把握することが困難」であることも、情報提供という支援が必要な理由の一つであると考えられる。患者が情報を得ることで、自分自身の評価をし、自己管理の継続の意欲や生活の改善を行うきっかけも作ることができるかもしれない。

また、患者本人のみではなく、家族に対しても情報提供は必要であるとされ、家族が肝疾患やその症状を理解することは、家族が患者を一番身近に支えるメンバーとして、より効果的に患者を支えるために必要である。患者自身が感じていることとして、「家族からの支援を受けているという実感」や「家族内での自分の役割」があることも、患者の療養継続を支えている²⁶⁾。しかし、家族を対象にした研究はまだ少なく、「患者と家族」という視点や、「家族が患者に対して行う支援」を意識した、看護師のかかわり方に関する研究も、今後必要である。

肝疾患患者は意思決定の場面においては、精神的な支えを看護師に求め²⁷⁾、家族や周囲とのかかわりも重要であると言われている²⁸⁾。IFN療法を受けることを決断するまでの患者の思いや体験によると、患者は家族からの支えの必要性や同病者から得る安心感など、社会的支援を受けていた²⁹⁾。看護師は患者の意思決定場で「情報提供」を主として行っているが²⁹⁾、精神的なかわりに関する記載はほとんど文献になかった。意思決定場で、患者が求める看護師のかかわり方と、看護師が実際に行っている支援では違いが見られており、その解離を埋めることが肝疾患患者のよりよい意思決定への支援につながるだろう。

肝疾患患者は、医療者ばかりでなく同病者にも情理的支援や精神的支援を求めており²⁵⁾³⁰⁾³¹⁾³²⁾、そのためには社会的支援が重要となる。家族は患者を取り巻く社会の中でも一番身近なものである。看護師は、意識の中では、患者への支援とともにそれを支える家族やその周囲を含めた支援が必要だと感じていた²⁰⁾が、家族を対象とした研究や家族への具体的支援についての研究は少なく、肝疾患患者の長期の療養を身近に支えている家族への支援も、患者への支援と同様に研究される必要がある。患者への社会的支援は「ソーシャル・サポート」とも言われ、様々な要因がからむ複雑なものであり、そのサポート源の一つとして家族も含まれる³³⁾。有効なソーシャル・サポート源を活用して、患者に適切なソーシャル・サポートが提供されるためには、看護師の支援も重要である。患者が求めるソーシャル・サポートを実践するために、看護師が肝疾患患者に必要なソーシャル・サポートをどのように捉えて実践しているかを明らかにし、患者の特性やニーズに合わせた「ソーシャル・サポート」が提供できるよう、研究が進められる必要がある。

検索した範囲では、看護師が肝疾患の進行状況や時期を

意識し、支援の内容を変化させているという研究は少なかった。また、肝疾患患者の療養生活が長期に及ぶということ意識した支援を行っているのか、その内容などに関する研究も少ない。そして、長期に渡って病気と付き合っていく患者とともに、それを支援する看護師の意識や行動も、長期の療養の間に変化することが予測される。それらのことより、患者の長期の療養を支えるためには、横断的研究のみではなく、縦断的研究も必要となり、看護師が肝疾患の進行状況や時期について、どのような認識を持って支援を実施しているのかということ明らかにする必要がある。

VI. 研究の限界

本研究は医学中央雑誌のデータベースを用いて得た情報を利用しており、データベースの特徴や範囲、機能に付随した限界があると考えられる。また、療養継続の支援内容の分析においても、研究者の意図を損なわないよう類似性に基づき分類したが、限界があると考えられる。

VII. 結語

肝疾患の看護に関する文献を検索し、療養継続の支援に関する文献の分析を行った結果、以下のことがわかった。

- 1) 肝疾患患者に関する看護研究は、2007年の肝疾患診療連携拠点病院の設置以降、一時的に文献数の増加がみられた。
- 2) 療養継続の支援に関する研究では、「患者の理解度を向上させるための情報提供」「患者の意思決定の支援」「闘病継続力を維持するために、セルフケア能力や生きがい、信頼（家族や医療者への）を支えるための情報提供と精神的支援」「患者の話聞き気持ちの整理を支援」を看護師は行っていた。
- 3) 長期的な療養が必要となる肝疾患患者を支えるためには、横断的研究のみではなく縦断的研究が必要である。
- 4) 支援の対象として、家族や同病者へのかかわりに関する研究は少なく、家族や同病者に焦点をあて、患者のソーシャル・サポートを意識した支援の研究が必要である。また、患者に実施している多様な支援を、看護師がどのような認識のもとで実施しているのか、支援内容を患者ニーズと照らし合わせ、検討していく必要がある。

文献

- 1) 日本肝臓学会 C型肝炎に起因する肝がん撲滅を目

- 指して 日本肝臓学会 1 - 6 2008
- 2) 全陽 中沼安二：背景肝障害と発癌 肝胆膵 53 (5) 611-617 2006
 - 3) 小池和彦：ウイルス性慢性肝炎 診断と治療の進歩 I. ウイルス性慢性肝炎の実態：世界の動向と本邦での問題点 日本内科学会雑誌 97 (1) 3-9 2008
 - 4) 鈴木康秋 大竹孝明 青柳豊 他：我が国における非B非C肝硬変の実態調査2011 日本肝臓学会 6 - 16 2012
 - 5) 肝炎対策基本法 厚生労働省
 - 6) 鈴木久美 野澤明子 森一恵 編：成人看護学 慢性期看護 病気とともに生活する人を支える 南江堂 2012
 - 7) 坂本祐子 中田晴美 庄田香世子：インターフェロン療法中の体調チェックシートにうつ尺度とQOL尺度を用いて明らかになったこと 日本看護学会論文集成 成人看護Ⅱ 39 164-166 2008
 - 8) 八重樫尚子 篠原紀子 石井由紀子：インターフェロン治療における症状とその看護 身体的症状と精神的症状との関連に着目して 日本看護学会論文集成 成人看護Ⅱ 37 479-481 2006
 - 9) 花田祐子 太畑繁子 奥中忍 他：インターフェロン療法を受ける患者の精神的副作用の把握を試みて 効果的な看護介入を目指して 京都市立病院紀要 27 (1) 68-70 2007
 - 10) 庄村雅子 長田成彦 加川建弘 他：肝がん患者と家族に対する看護相談内容の傾向および看護相談の普及へ向けた提案 東海大学健康科学部紀要 16 39-51 2010
 - 11) 酢谷優子 前田涼子 民谷宏美 他：肝臓病教室のグループワークが肝硬変患者・家族にもたらす影響 内服管理・排便コントロール・肝性脳症について 日本看護学会論文集 (看護総合) 40 21-23 2010
 - 12) 今永美波 大津山樹理 末継拓郎 他：看護師による肝硬変患者教室の有効性 久留米医学会誌 74 316-323 2011
 - 13) 片山和宏 山口敦子 加藤道夫 他：慢性肝疾患患者を対象とした肝臓病教室での情報提供に対する医療者および患者の意識調査に関する検討 肝臓 50 (7) 356-361 2009
 - 14) 東真裕美 澤田喜久美 田端佳鶴子 他：再入院した肝硬変患者に自己管理の継続をもたらす日常生活指導 退院後の追跡調査を行って 日本看護学会誌 成人看護Ⅱ 35 222-224 2004
 - 15) 柴坂美智子 大西千尋 米谷左笑：肝疾患患者が安心して日常生活を送るための退院指導を試みて 三豊総合病院雑誌 31 8-21 2010
 - 16) 渋谷由紀江 原田あいこ 水元陽子 他：インターフェロン療法を受けている患者への外来における看護介入の検討 バンフレットと自己管理日誌の作成・使用を試みて 日本看護学会誌 成人看護Ⅱ 34 185-187 2003
 - 17) 梶山洋雄 勝田有美 細川敬依子 他：外来におけるペグインターフェロンとリバビリン併用療法患者の意見を取り入れたクリニカルパスの作成とその効果 日本看護学会誌 成人看護Ⅱ 39 355-357 2008
 - 18) 池田牧 稲吉美津子：肝臓がん患者の体験と看護師の支援 日本がん看護学会誌 2010
 - 19) 山田隆子 名越恵美 藤野文代：肝細胞がん患者に対するケアの様相 看護師の語りから 日本ヒューマンケア学会誌 3 (1) 75-82 2010
 - 20) 不破理映 有村綾子 羽鳥薫 他：インターフェロン療法を受けるC型慢性肝炎患者に対する支援「懇談会」を実施して 日本看護学会誌 成人看護Ⅱ 38 266-268 2007
 - 21) 藤井小夜子 大元謙治 向井公浩 他：慢性C型肝炎を有する透析患者のインターフェロン療法における精神的看護 透析ケア 15 (1) 97-101 2009
 - 22) 沼田直子 黒田千恵子 湯川綾子 他：インターフェロン療法を受ける患者の自己効力感と治療継続との関係性 国立病院看護研究学会誌 6 (1) P27-32 2010
 - 23) 渡辺ゆかり 飯田敬子 金井麻依 他：肝疾患患者への栄養指導に対する看護師の意識の変化に関する研究 名古屋市立大学病院看護研究集録 2009 8-14 2010
 - 24) 安達知美 五十嵐久美子 坪沼仁子：外来でインターフェロン療法を受ける患者に対する看護師の関わり方の変化 日本看護学会論文集 成人看護Ⅱ 40 254-256 2009
 - 25) 平松知子 泉キヨ子：C型肝炎由来のがん患者が辿る肝炎診断から現在までの心理と療養行動 日本看護研究学会雑誌 28 (2) 31-40 2005
 - 26) 山田隆子 名越恵美：慢性肝疾患から肝細胞がんへ移行する患者の病みの軌跡 日本看護福祉学会誌 15 (2) 1-14 2010
 - 27) 平岡敬子 山内京子 岩本由美 他：慢性肝疾患患者が期待する看護職の役割 インフォームドコンセントにおける看護職の説明役割の検討 日本難病看護学会誌 7 (2) P137-142 2003
 - 28) 安川和希 藤田倫子：肝がん患者が語る闘病生活に対する家族の支援 高知大学看護学会誌 2 (1) 15-22 2008

- 29) 上村笑 南波千恵美 樋脇真由美 他：C型肝炎患者がインターフェロン療法を受けるに至った保健行動に影響する要因の分析 日本看護学会論文集 成人看護Ⅱ 39 292 - 294 2009
- 30) 山中道代 黒田寿美恵 網島ひづる：肝がん患者のセルフケア行動とセルフケア行動に影響する要因 人間と科学 (広島県立保健福祉大学誌) 5 (1) P119 - 127 2005
- 31) 中野昌江 石元咲子 金山美和 他：慢性肝疾患患者のセルフケア行動に影響する要因 国立高知病院医学雑誌 19 P89 - 94 2010
- 32) 永松有紀 野本ひさ：肝がん患者の闘病継続力に関する検討 闘病者の生活調整に焦点をあてて 日本がん看護学会誌 21 (2) 4 - 13 2007
- 33) Jane Norbeck (著) 南裕子 (訳)：看護におけるソーシャル・サポート 理論と研究の接点 看護研究 19 (1) 3 - 24 1986